

次の文章は古井由吉著「香子」の一節であり、主人公である「彼」が下山の途中、「女」（香子）と出会う場面である。本文を読み、後の問に答えなさい。

ゆるやかに傾く河原の、二十米ほど下手から、女の蒼白い横顔が、それだけ、彼の目の中に飛び込んできた。

それは人の顔でないかのように飛び込んできて、それでいて人の顔だけがもつ気味の悪さで、彼を立ちすくませた。ところが、顔からくる印象はそれだけだったり途絶えてしまつて、彼はその顔を前にしながら、いままで人の顔を前にして味わつたことのない印象の空白に苦しめられ、徐々に狼狽^aに捉えられていった。

人の顔ならば、いつでも、誰にも見られていない時でも、たえず無意識のうちに発散させている体臭にも似た表情があるものだ。

そんな表情まできれいに洗い流されたように、その顔は谷底の明るさの中にしらじらと浮かんできた。そうかと言って、よく山の中で疲労困憊した女の顔に見られるように、目鼻立ちが浮腫^{ぶとむ}みの中へ溺れていく風でもなく、目も鼻も唇も、細い頤^ごも、ひとつひとつはくつきりと、哀しいほどくつきりと輪郭を保っている。女はすこし手前に積まれたケルン^{註し}を見つめていた。（A）見つめてはいののだが、その目にはまなざしの力がない。そして顔全体がまなざしの力によってひとつの表情に集められずに、目の前のケルンを見つめるほどに（B）ケルンの一途な存在に表情を吸い取られて渺^{びよう}とした感じになつていき、未知の女の顔でありながら、まるで遠くへ消えていくかすかな表情を記憶の中からたえずつかみなおそうとするような緊張を、行きずりの彼に強いた。彼の緊張がすこしでもゆるむと、その顔は無表情どころか、物体のおぞましさを顕しかける。（C）彼はそこにいるのが人間であることの証しを、自分が立てなくてはならないとでもいうような気持ちに追い込まれて、逃げ腰ながら、目だけは一心に女の横顔を見つめ、そして知らず知らずのうちに自分自身の記憶を幼い頃のほうにむかつて探つていた。しばらくして、^①泣きつかれて、庭の隅にかがみこんで石ころを見つめている子供の顔だなどと彼はつぶやいた。そして（D）凝視^bをゆるめて女の全身を見まわした。

軀^{からだ}にはまだしも表情があった。まだ少女のような軀つきだった。女はリュックサックを背につけたまま、小さな腰を岩の上につらそうにのせ、肌色のアノラック^{註と}につつまれた上半身を前に傾けて、両腕を胸の前で組みかわしていた。細い肘^{ひじ}がくぼめられた下腹を両脇からきゆうっと押さえつけ、たがい違いになった手のひらが肩から腕のあたりをいとおしげにさすっていた。黒いストラックスをはいた脚は太腿をきつく合わせていたが、膝から下がなにか困りはたように互いに外側へゆるく開き、キャラバンシューズのつま先が地面の砂利の中へひしひしと喰いこもうとしている。そんな姿勢から、顔がどこことなく全身の防禦の構えにそぐわない感じで、まるで何かに引き渡されたように前に差し出されている。それでも全身を見まわしてまた顔を見つめると、顔はもうはじめに見たと

きほど無表情ではなくなっていた。女は眉をかすかに顰^{ひそ}めて、唇を細くひらき、軀の内側の痛みをしつとこらえているように、目の前に積まれたケルンに見入っていた。そこにいたわるべき病人のいることに彼はようやく気がついて、若い登山家らしい態度を取り戻し、女のほうにむかつて足を踏み出した。

山靴に触れて小石がひとつ転がり出し、女のほうにむかつて五、六米落ちて、勢い尽きて止まった。女が顔をわずかにこちらに向けて、彼の立っているすこし左のあたりをぼんやりと眺め、何も見えなかったようにもとの凝視にもどった。それから、彼の影がふつと目の隅に残ったのか、女は今度はまともに彼のほうを仰ぎ、見つめるともなく、鈍いまなざしを彼の胸もとに注いだ。気がつくくと、彼の足はいつのまにか女をよけて右のほうへ右のほうへと動いていた。彼の動きにつれて、女は胸の前に腕を組みかわしたまま、上半身を段々によじり起こして、彼女の背後のほうへ背後のほうへと消えようとする彼の姿を目で追った。

女のまなざしはたえず彼の動きに遅れたり、彼のところまで届かなくなったり、彼の頭を超えて遠くひろがったりしながら従^ついてきた。彼の歩みは女を右へ右へとよけながら、それでいて一途に女から遠ざかろうとせず、女を中心にゆるい弧を描いていた。そうして彼は女との距離をほとんど縮めずに、女とほぼ同じ高さのところまで降りてきて、苦しそうに軀をこちらにねじ向けている女を見やりながら、そのまま歩みを進めた。

その時、彼はふと、鈍くひろがる女の視野の中を影のように移っていく自分自身の姿を思い浮かべた。というよりも、その姿をまざまざと見たような気がした。歩むにつれて、形さままな岩屑の灰色のひろがりの中に、その姿は女のまなざしに捉えられずに段々に傾いて溺れていく。漠とした哀しみから、彼も女を見つめかえした。すると女の姿も彼のまなざしにつなぎとめられずに表情をまた失い、はつきりと目に見えていながら、まわりの岩の姿ほどに訴えてこない。彼はすでに女の姿を背後に打ち捨てて歩み去るころになった。

それから、まわりの岩という岩がいまにも本性を顕して河原いっばいに雪崩れてきそうな、そんな空恐ろしい予感に襲われて、彼は立ち止まった。足音が跡絶えたとたんに、ふいに夢から覚めたように、彼は岩のひろがりの中にほっそり立っている自分を見出し、そうしてまっすぐに立っていることにつらさを覚えた。それと同時に、彼は女のまなざしを鮮やかに軀に感じ取った。見ると、荒々しい岩屑の流れの中に浮かぶ平たい岩の上で、女はまだ胸をきつく抱えこんで、不思議に柔軟な生き物のように腰をきゆうつとひねって彼のほうを向き、首をかしげて彼の目を一心に見つめていた。その目を彼は見つめかえした。まなざしとまなざしがひとつにつながった。その力に惹かれて、彼は女にむかつてまっすぐに歩き出した。

(古井由吉著『杳子』による。ただし原文の一部を改変した。)

(註1) ケルン——山頂や登降路を示すため石を積み上げたもの

(註2) アノラック——登山やスキーで使用する頭巾のついた防寒用上着

問1 空欄部A～Dに入る最もふさわしい語を次の1～5の中から選び、その番号を記しなさい。

- 1 ようやく
- 2 いっそう
- 3 かえって
- 4 たしかに
- 5 そのたびに

問2 傍線部a～cの漢字の読みを記しなさい。

問3 次の1～5は、彼に対する女のまなざしの推移を述べたものである。それぞれに対応して生じた彼の行動をイ～ホの中から選び、その記号を記しなさい。

- 1 女はまだ彼の存在に気付かず、そのまなざしは力なくケルンに注がれている。
- 2 女は鈍いまなざしを彼の胸もとに注ぐ。
- 3 女のまなざしは彼の姿を見失いながらも、彼の動きを追う。
- 4 女のまなざしは結局彼をとらえきれない。
- 5 女のまなざしははつきりと彼をとらえる。

イ 彼は女に背を向けて歩み去ろうと思う。

ロ 彼の足はいつの間にか女をよけて右へ右へと動く。

ハ 彼は女のほうに向かって足を踏み出す。

ニ 彼は女に向かってまっすぐに歩き出す。

ホ 彼の歩みは女を中心にゆるい弧を描く。

問4 「なぜ「彼」は「知らず知らずのうち」に自分自身の記憶を幼い頃のほうにむかって探っていた」(傍線部①)のか、その理由となる部分
分を本文中から探し出し、最初の五字と最後の五字を記しなさい(句読点は含まない)。

問5 「なぜ「彼はすでに女の姿を背後に打ち捨てて歩み去るところになった」(傍線部②)のか。その理由を七十字以上、八十字以内
(句読点を含む)で記しなさい。